

《経蔵》再考

——類型と機能——

堀 祥 岳

序

—— 有難や釈迦一代の蔵経を、大唐よりもわたしつゝ、末世の衆生済度のために、輪蔵に納め結縁の、手に触れ縁をむすはせんとの、御神の誓ひそ有難き

これは謡曲「輪蔵」の一節である。^①この謡曲は一六世紀初頭に成立した脇能物で、太宰府の僧が参詣した北野天神の輪蔵を舞台に、経巻の守護神たる火天と輪蔵を考案したとされる傳大士が、一夜のうちに全ての経巻を拝ませる、という内容をもつ。

一切経を収納する輪蔵は“一回転させると一切経全巻を読んだのと同じ功德がある”として現在まで世俗の信仰をあつめてきた。輪蔵は『禅林象器箋』^②に「機輪を設け、転法蔵を運ぶ也」とあるように回転式の書棚であり、経蔵内部に設置された建造物である。中国で発明された輪蔵は、その造営方式が日本にも輸入さ

れ、一切経の収蔵庫として鎌倉期以降に広まった建築である。謡曲「輪蔵」が成立した段階で、輪蔵が一切経との結縁を願う人々にとって身近な存在となっていたことが窺える。

ところが、それ以前の経蔵は必ずしも人々にとって身近である印象は与えてくれない。

古典文学の世界で著名な《宇治の宝蔵》イメージの源泉となった平等院経蔵は、一切経のみならず典籍・楽器など撰閲家が収集した重宝が納められた、まさに宝蔵であった。建保七年（一二一九）に成立した説話集『続古事談』の「第一王道・后宮」に次のように描かれる。

—— 鳥羽院、宇治に御幸ありて、経蔵ひらきて御覧じけるに、此経蔵は、よのつねの人いる事なきに、富家殿、御前に候給て、播磨守家成、時の花にてありければ、御気色にかなはんとやおぼしけん、召入られけり。

平等院経蔵は毎年恒例の一切経会にあたって藤氏長者の前で開扉されるほかは、天皇・上皇の行幸や、藤氏長者の代始に経蔵を検分する「宇治入り」の時などを除き収納物は秘匿されていた。四方を回廊に囲まれたその経蔵は、常に閉ざされ民衆には手の届かない存在であった。

さて、輪蔵も平等院経蔵のような宝蔵も寺院建築としては同じ《経蔵》という名称で一括されるが、両者に対するイメージには大きな隔絶がある。実際の建築構造も多様である《経蔵》に対して適切な分類や名称を与えていない研究上の問題がまずは考えられるが、一方で史料上でいずれも「経蔵」と呼ばれるのもまた事実である。

本稿では、多様な《経蔵》を建築構造から整理した上で、《経蔵》の機能について、伽藍の中で、さらに

は社会の中でどのような役割を果たしたかまでを見据えて検討していきたい。

なお、《経蔵》に収納される一切経^⑤については、教義・書誌に関する研究のほか、書写一切経であれば写経や勧進について、版本一切経であれば輸入と所在（移動）について、それぞれ研究の蓄積は厚い。ただし、これらの研究はいずれも經典が経蔵に安置されるまでのプロセスを対象とした考察であり、その利用の局面に関する研究は未だ研究蓄積の途上にあるといえよう。また近年、一切経が生み出す正統性や權威に保有者が意義を見出していく、といった側面が注目され、一切経は日本における宗教秩序の形成過程を探る上でも重要な検討対象となっている^⑦。本稿は一切経を直接の対象とするものではないが、一切研究への一つのアプローチとして《経蔵》のあり方を歴史的に捉え直すことを目的としたい。

一 《経蔵》の諸類型

経蔵を建築構造から分類するならば、まずは単層か重層、つまり一階建か二階建か、という区分けができる。

二階建の経蔵は楼造で、経楼とも呼ばれる。一方、単層の経蔵には内部に輪蔵をもつか否かが指標となり、輪蔵のない経蔵は、およそ内部に経函（唐櫃）を納める棚を備える。以下に、それぞれの事例を示す。

① 経 楼

経楼の例は少なく、奈良時代に建立されたであろう法隆寺経蔵・唐招提寺鼓楼・薬師寺経楼と、平安期の法成寺経蔵・法勝寺経蔵・中尊寺経蔵、鎌倉時代に建立された東福寺経蔵が、それぞれ史料にみえる。これ

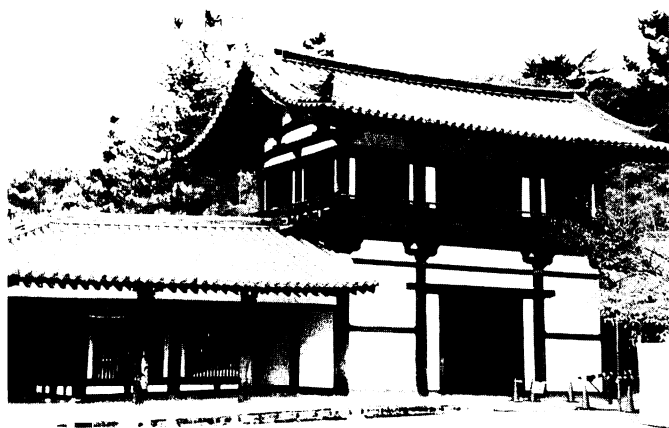
らの経楼に共通する要素は、伽藍配置の中で鐘楼と対称をなす位置にあり、建物の規模も鐘楼と対をなすように設定されている点にある。ただし、奈良期の三者は回廊から独立した位置にあるのに対し、鎌倉期の東福寺経蔵は山門と一体化した建築である点が特徴的である。

法隆寺経蔵は、天平一九年（七四七）「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」に「楼二口（一口経楼、長三丈一尺、広一丈八尺、一口鐘楼、長三丈一尺、広一丈八尺）」とあるうち「経楼」にあたる奈良時代の遺構である（図1）。

唐招提寺鼓楼は仁治元年（一二四〇）に再建されたもので、再建後は鼓楼¹⁰と呼ばれるが元来は経楼で承和二年（八三五）の「招提寺建立縁起」¹¹にみえる「経楼」が再建前の鼓楼にあたると考えられている。

薬師寺にも現存しないが経楼があり、長和四年（一〇一五）成立の「薬師寺縁起」¹²に「経楼一口、長三丈七尺、広二丈五尺、柱高三丈、俗云大経蔵、右天禄四年二月廿七日焼亡」とある。同書の鐘楼が「鐘楼一字、丈尺如経楼（後略）」とあるように、やはり経楼と鐘楼は同等な形式で一对として存在していた。

鎌倉期に創建された東福寺にも経楼があったが、こちらは楼門（山門）と廊によって結ばれた二階建の建築であった。建長二年（一二五〇）の「九条道家惣処分状」¹³に、



【図1】 法隆寺経蔵

二階楼門一字〈五間、有妻廂〉奉安置一丈六尺多間・持国像各一軀、

二階鐘樓・経蔵并東西廊各五箇間、楼門并廊上層、奉安置一尺六寸积迦像千軀、西鐘樓鐘一口（後略）

とあり、楼門の東側に廊づたいの経楼があつたことが知られる。東福寺の伽藍は鎌倉末期の火災で全焼したが、建武三年（一二三六）十二月の「東福寺諸堂造営注文」⁽¹⁵⁾に「山門并鐘樓経蔵」がみえ、再建時にもなお山門と鐘樓・経蔵が一連の建築として建造されたことが窺える。また、円覚寺にもその古図【図2】にみえるごとく東福寺同様の鐘樓・経楼があつたことが推定されている。⁽¹⁶⁾

② 書架式経蔵

輪蔵のない単層の経蔵を仮に書架式経蔵と名付ける。

醍醐寺の場合、保元元年（一一五六）六月二三日「醍醐寺座主元海起請等案」⁽¹⁷⁾に

経蔵一字〈五間事〉

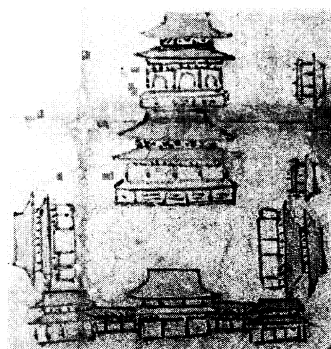
以北三間、安置一切経并宗章疏・伝記等、不可令散失、

以南二間、安置真言儀軌・本經次第・先德抄記并秘仏・秘

曼荼羅・道具等、

とあり、架蔵された壁面は南北の二面である。

続いて春日社の場合、『大乘院寺社雜事記』寛正三年（一四六



【図2】 円覚寺境内絵図（部分）
円覚寺所蔵

（関口欣也『名宝日本の美術 13 五山と禅院』小学館、1983より転載。）

二〇月二七日条に

一、一切經御經藏開之、拝見、物藏司宗秀律師・目代堯蓮房各付衣ニテ参向、予小衣上下、為結縁令見之、所及見少々記之、

中央ツシ金泥大般若一部、唯識論一部、同願文等在之、峯殿関白御法名行恵御願、供養師大僧正円実云々、

東棚古来之一切經転読毎日著到数百帖在之、其外諸經等在之、

北棚金泥大般若在之、

西棚朱櫃五合在之、(鑑無一、)

惣而東北西之棚二一切經櫃数十合在之、(後略)

とあり、東西北三方の棚に加え、中央に厨子が安置してあつたことがわかる。

『蔭涼軒日録』長享二年(一四八八)五月五日条には、一切經を足利義政に献上すべく交渉にあらわれた大内氏雑掌への対応について幕府政所奉行人が蔭涼軒主亀泉集証に指示をだす場面が記録されている。(※便宜上、奉行人の發言を「」で、大内氏の在京雑掌から直接提案を受けた亀泉集証が問いに答えた發言を「」で、發言内の引用部を【】で括った。)

又問曰「藏經函数如何」、答「七千藏也、凡七百合許歟、【今度自高麗来藏經函者、太半六十合有之、經亦皆トチ本也】云々、今有全藏之所無之、太畔缺耳」、又問曰「無輪藏所如何安之哉」、「造經藏収之」、

又曰「東府可被置藏經、大内所持之藏經可有御所望、若有闕典者不可被仰、有全藏者可御所望、先以內儀可尋」之命有之、答曰『可尋彼雜掌』云々、⁽¹⁸⁾

一切經七千卷に対する七〇〇函という函数は、輪藏への架藏に対応した経函数であろう。例えば、寛文三年（一六七三）の建立とされる妙心寺経藏は八〇〇函⁽¹⁹⁾、応永十九年（一四二二）建立の北野社輪藏の「漆塗経箱」が現存するもので五五〇函⁽²⁰⁾、応永十五年（一四〇八）の岐阜・安国寺輪藏で五三九七卷・四九五函（棚）あるのが参考になる。

ただし、今回の朝鮮から輸入した一切經の函は六〇函であった。例えば、春日社経藏には八五函の朱櫃に一切經が収められ三方の棚に安置されていた。⁽²¹⁾ 東寺では、康和四年（一一〇二）に「一切經櫃百余」が新調されている。比叡山経藏の一切經は唐櫃六一函に収藏されていた。⁽²²⁾ これらをふまえれば、「六十合」という函数は書架式経藏に収める経函数としては妥当な数であったといえる。とはいえ「全藏」であることを重視した奉行人は「六十合」という函数を疑問に感じたのだろうか、欠巻の有無を確認するよう命じている。

さて、引用史料で奉行人は、一切經の安置場所について「輪藏」への安置を前提としていたようである。

長享二年の段階で、もはや一切經の安置方法として輪藏が一般化していたことが窺われるが、亀泉集証はそれに対して、「経藏」を造り収めればよいとの見解を示した。この「経藏」は書架式経藏を指すとみてよい。経函数からの判断なのか、まずは経藏に収めればよいとの判断なのか、輪藏への執着が全くないのか、亀泉集証の意図はにわかに判じがたい。結果的に、「蓋藏経事、急上之者不可有置所、見立経藏以後可上、（中略）藏経事有領掌者、先々可被置国、於東府可被建藏殿、々々造畢後、可被召上之命有之」⁽²⁴⁾ という判断が下されたが、ここである「藏殿」というのは「輪藏」と「経藏」の総称として用いて、いずれを建造するかを

留保した表記をしたものと考えられる。

③ 輪 藏

輪藏は中国南北朝時代の傅大士が考案したとされる建造物である。日本にその建築を伝えたのは入宋僧の栄西であり俊苾であつたと考えられる。

建久二年（一一九二）に南宋から帰国した栄西は、『興禪護国論』の中で「宋朝の奇特、二十箇あり、（中略）十六に経藏・僧堂は莊嚴、浄土の如し」と著し、自らのイメージを一新させる浄土世界のごとき経藏の様式・装飾を目撃した旨を示している。これはまさに輪藏の莊嚴を指すのではなからうか。

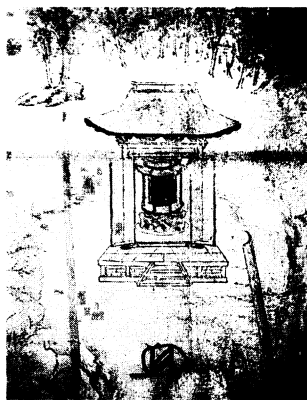
一方、建暦元年（一二二二）に南宋から帰国した俊苾は、泉涌寺の伽藍造営にあたりその構想を示した承久二年（一二二〇）二月一〇日「泉涌寺殿堂房寮色目」⁽²⁵⁾に、

一 法輪宝藏

右輪藏者、安置唐本一切経於八角輪層之中、若有人一転此藏、則擬転読一切経一藏也、起自梁傅大師（弥勒化身也）利生之門至今宋朝以為盛矣、

と示し、八角輪藏の機能と宋で隆盛していたことを伝えている。

この輪藏が実際に造営されたかは定かではないが、日本にそれまで存在しなかった輪藏を導入しようとした初例とみてよいだ



【図3】 明月院境内絵図（部分）
明月院所藏
（関口欣也『五山と禅院』より転載。）

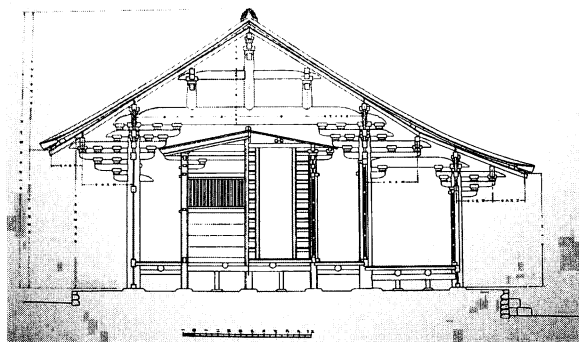
ろう。

建長五年（一二五三）に創建された建長寺には当初輪蔵が設置されたようである。建長寺所蔵「建長寺指図」は元弘元年（一二三二）に書写された伽藍図で、その耆旧寮の位置が「根本輪蔵跡」であることが記されている。永仁元年（一二九三）あるいは正和四年（一二三五）の火災で焼失したか、廃絶の経緯は不明だが、嘉暦二年（一二三七）には跡地に耆旧寮（十僧閣）が建立されており、²⁶「指図」に再建された輪蔵はみえない。同じく鎌倉の明月院にも境内絵図があり、応永元年（一三九四）頃の景観を示すと考えられている。²⁷明月庵・宗猷庵・三重塔とともに描かれた経蔵は正面扉が開かれ、中央に岩座付輪蔵がみえている【図3】。輪蔵を描いた早い事例として注目される。

以上のように、経蔵には主に経楼・書架式経蔵・輪蔵の三通りの造営方式がある。このほかの類型としては、経所（読経所）を経蔵とした例（後述）や、内部に経室をもつ醍醐寺経蔵（桁行三間・梁間二間）【図4】²⁸などが挙げられる。後者は書架式経蔵と輪蔵の中間的形態ともいえよう。

ここで、経蔵に納められた物品に言及しておきたい。収蔵されたのは、必ずしも一切経だけではなくだった。

応永二四年（一四一七）の写本が伝わる『山門堂舎記』²⁹は比叡山



【図4】 醍醐寺経蔵（梁行断面図）

（京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財醍醐寺開山堂・如意輪堂修理工事報告書（災害復旧）』1999より転載。）

延暦寺の伽藍についてその沿革を記した寺誌である。同書に引用された貞観元年（八五九）の「勘定資材帳」には「葺檜皮五間経蔵一宇（長三丈三尺、広一丈六尺、高一丈二尺）」がみえ、「根本経蔵」の説明が次のように記されている。

根本経蔵（在虚空蔵堂南）

葺檜皮五間一面経蔵一宇、一切経律論賢聖集并唐本天台宗章疏・新写经・伝記・外典・伝教大師平生資具・八幡給紫衣等安置之、

とある。醍醐寺や春日社経蔵の収蔵物は②書架式経蔵の引用史料にみえる。いずれも一切経に加えて仏典の注釈書である章疏などの典籍類が総じて保管されていた。

収蔵品の多様性が突出しているのが平等院経蔵であり、また平等院経蔵を継承した鳥羽勝光明院経蔵である。両者の連続性は、『長秋記』長承三年（一二三四）八月六日条に、「六日癸未、入夜風雨下、除服後始参院、以師行進御経蔵指図、一、天王寺体、一、宇治経蔵体、可被用宇治之由被仰、家成朝臣可作云々」とあるように、施主の鳥羽法皇が勝光明院経蔵を建立する際に平等院経蔵を模範としたことからわかる。言うまでもなく鳥羽院は建築だけでなく、その機能面においても平等院経蔵を継承し、そして対抗しようとしたものである。

序でも紹介した平等院経蔵の特性については田中貴子氏の指摘以来、上島享氏や最近では横内裕人氏が後白河院による蓮華王院宝蔵の創出までの展開を整理されているが、これらは史料上で「経蔵」とあっても類型上は宝蔵④とすべきであろう。建築構造としてはおそらく書架式経蔵の範疇になろうが、収蔵品とそ

の存在意義から①―③の経蔵とは区別されるべき存在である。

ところで、平等院経蔵・勝光明院経蔵の前段階の経蔵といえる法成寺経蔵・法勝寺経蔵は、いずれも経楼であつた。³¹ 経楼には何が収蔵されたのだろうか。

中尊寺経蔵文書の天治三年（一一二六）三月二四日「藤原清衡中尊寺供養願文」³²は経楼の内実を示す貴重な史料である。

奉建立供養鎮護国家大伽藍一区事

（中略）

二階瓦葺経蔵一字、

奉納金銀泥一切経一部、

奉安置等身皆金色文殊師利尊像一體、

右経巻者、金書銀字挟一行而交光、紺紙玉軸合衆寶而成巻、漆匣以安部帙、琢螺鈿以鏤題目、文殊像者憑三世覺母之名、為一切経蔵之主、廻惠眼照見、運智力以護持矣、

本史料をめぐっては『吾妻鑑』文治五年（一一八九）九月一七日条の「寺塔已下注文」とあわせて龐大な研究の蓄積があるが、「鎮護国家大伽藍一区」が中尊寺内の一伽藍であり白河院の御願寺であつたという見解をここでは支持したい。³³ 丸山仁氏によれば、「鎮護国家大伽藍一区」は藤原清衡が摂関家との結びつきを背景に、藤原頼通が造営した法成寺釈迦堂をモデルにして白河院のために造営した御願寺だとされる。ここから、右史料の経楼も法成寺の経楼をモデルとしたものと考えられないだろうか。

「金銀泥一切経」は現在その大半が高野山に伝来するが、日本における書写一切経の極致ともいべき宝物である。中尊寺には鳥羽院によって施入された宋版一切経も存在し別の経蔵に納められたと考えられているが、この経楼と経蔵は収藏品と内部構造から、その存在意義を区別して検討されねばならないだろう。つまり、経楼に安置された金銀泥一切経は仏典というよりは宝物であり、田中貴子氏が〈宇治の宝蔵〉に見出したような〈王権〉のシンボリズムが経楼にもあったとは考えられないだろうか。田中氏は深沢徹氏の所論²⁴などをもとに楼門にも言及され、閉鎖された密室である楼上空間に宝蔵と同様の存在意義を指摘されている。中尊寺の経楼をどこまで一般化できるかは慎重な検討が必要であるが、経楼には宝蔵に連なる要素が見出していることを指摘しておきたい。

このように《経蔵》はそのカタチのみによって類型化できるものではなく、収蔵されたモノが何だったかをも踏まえた上で分類し理解されねばならないといえる。

二 一切経利用と《経蔵》

《経蔵》の基本機能が前節でみたように經典や宝物を収蔵することにあるのは言うまでもないが、恒常的に施設を利用するような機会はあったのだろうか。ここでは、とくに収蔵された一切経の利用場面において《経蔵》が果たした役割を検証してみたい。

① 書 写・校 合

寺社に施入された一切経を利用する場面として、すでに須田牧子氏や大塚紀弘氏が事例を紹介されている

ように、⁽³⁵⁾まずは經典を閲覽し書写・校合に用いるという場面が想定されるが、それはどのような場でなされたのだろうか。

岐阜・新宮神社（高賀山）が所蔵する觀普賢經の奥書⁽³⁶⁾には、

（朱筆）「於長滝寺經藏一交了、金剛資」

觀応三年六月七日 書写了、

郡上郡高賀山嚴新宮五部大乘經内也、

願主 僧淨覺和尚

筆主 沙弥 淳真

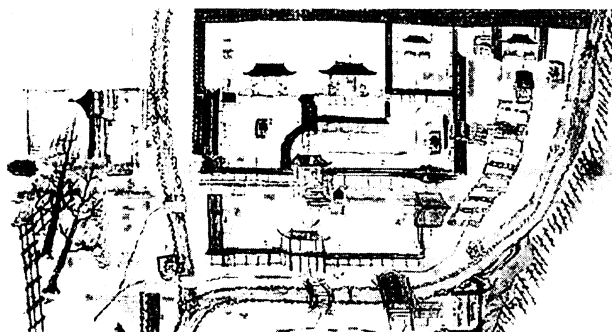
とあり、觀応三年（一一三二）にすでに書写されていた經本の校合が長滝寺經藏においてなされたことがわかる。美濃長滝寺には明治末年の火災で焼失した四二箱分をのぞき一九六箱・三七五二卷の宋版一切經が現存している。一四世紀当時の經藏の内部構造は明らかでないが、特定の經本を校合するほどのスペースはあったのだろう。

京都・妙蓮寺で発見された松尾社一切經は、永久三年（一一一五）から康治二年（一一四三）にかけて書写された一切經で、三五四五卷の卷子本が三八箱に納められていた。⁽³⁷⁾その一部は、奥書から松尾社の「読經所」で書写されたことが判明する。松尾社の読經所はのち經所とも呼ばれ、室町前期作成の「松尾大社絵図」にもみえるが、嘉永七年（一八五四）に読經所が取り壊されるまで一切經がこの建物に安置されていたらしく、松尾社にとっての經藏はこの読經所であったと考えられている。

京都・賀茂社では上社・下社ともに一二世紀初頭までに御読経所と経蔵が設置され、経供養など恒例法会のもととして御読経所が利用されていた。⁽³⁸⁾室町後期作成の「上賀茂社絵図」(【図5】)に「経所」がみえるが、その外観から経蔵と読経所が結合したものと推察される。⁽³⁹⁾

岐阜・安国寺に施入された元版一切経も対校本として校合に利用されており、同じ飛騨国の円通寺(現・禅昌寺)で応永二年(二三九五)に購入された春日版大般若経の奥書にその記録が残っている。⁽⁴⁰⁾例えば第六巻に「以飛州路太平山安国禅利大蔵経本、於同利凝翠軒校合此経畢、時応永上章執徐林鐘下濔日」とあり、応永庚辰年つまり応永七年の六月下旬に安国寺塔頭凝翠軒において校合されたことがわかる。また第六〇〇巻に「以飛州太平山安国禅利大蔵尊経校合了、応永十一祀閏逢君灘林鐘中濔日、円通住持竹処叟崇園書印」とあり、応永十一年八月中旬には校合が完了したものとみられる。現存する安国寺経蔵の建立は真木墨書銘から応永一五年と判明しており、一切経は経蔵の建造に先んじて施入されたことになる。この場合の校合場所は奥書にみえるように塔頭・凝翠軒であった。

いずれにせよ、大量となる一切経の書写にあたっては、より採光のある室内空間が必要とされたことは想像に易い。それは次にみる一切経転読の場面でも同様だったようである。



【図5】 賀茂別雷神社境内絵図(部分) 賀茂別雷神社所蔵
(左上の建物が「経所」。)

② 転 読

奈良・春日社では、一切経の転読が連綿と続けられていた。

『大乘院寺社雜事記』寛正三年（一四六二）一〇月二七日条（前節②引用史料の後段部）に、

（前略）以上当経藏者白河院御願也、料所越前国河口庄、康和年中御寄附者也、為檢校所數代大乘院知行所也、去応永卅四年安位寺殿被披見以後、又今日始也、於一切経者毎月六个度奉出之、

とあり、この大乘院門跡・尋尊の経藏披見は、経覧が応永三四年に披見して以来のことであつた。尋尊は康正二年（一四五六）に興福寺別当に就いているが、この時点ですでに五年経過しており、別当代替に伴う披見とはいえない。尋尊が経藏に頻繁に出入りすることがなかつた一方で、一切経は一切経衆によつて「毎月个六度」持ち出され転読されていた。そして第一節②の引用史料で「古来之一切経転読毎日著到数百帖」とみえるごとく、一切経衆の日々の出頭は着到帖に記録された。

『大乘院寺社雜事記』文明六年（一四七四）三月一二日条に、

一、一切経毎日著到数百帖召寄之、古帳悉以無之、子細如何、応永以来分也、不審々々、決合候処、自
応永十八年比至当年在之、此内猶以粉失帖数多在之、

一年中分十三帖也、閏年八十四帖也、此内一帖ハ悉皆真言経分年中分記之、毎日一卷宛、合三百六十卷、
不謂大小月也、小月ハ晦日二二卷読之、真言経衆ハ毎月五人也、

物經衆ハ毎日十九人ニ一卷宛十九卷、一月分五百七十卷、八个月ニ一巡、四千五百六十巻読之、真言經ハ十二个月ニ一巡、三百六十巻也、合四千九百廿巻。

著到ハ僧正以下僧綱分ハ官位書之、已講以下ハ不書之、実名計也、著到料紙ハ毎月一帖二十七枚ヘクツシ或大蔵、両面ニ書之故料紙厚也、料紙ニ二押折テ、四枚五枚ツ、引重テ中ヲトツ、唐トチノ様也、真言經方同前、料紙自納所出之、

とあり、着到帖は一ヶ月で一冊作成され、真言經衆による真言經転読は別に一年で一冊の着到帖が作成された。

『大乘院寺社雜事記』長祿四年（一四六〇）三月二〇日条には、

一、春日一切經御廊結番懸札ハ、康和二年ニ被始之時ノマ、ナリ、雖然於供衆等名字者、毎年書改之、仍當時ノ供衆之名字ナリ、於年号者康和二年ト書之者也、為惣藏司代役毎年書之云々、札ハ黒ヌリ、文字コフン白也、

とあって「一番（自一日至六日）」から「五番（自廿五日至晦日）」の一切經転読結番衆を記した「結番状」が引用されている。また『大乘院寺社雜事記』寛正四年（一四六三）二月一日条に「当門跡方諸御願等供衆令自専条々」が記載され、「惣藏司職」（一人）、「別藏司職四人」、「一切經転読經衆九十五人」、「真言經衆五人」以下、經藏に不随する供衆である「一切經方」の構成がわかる。一切經転読のための結番には惣藏司や承仕も編成されるが、実際に転読にあたるのは「一切經転読衆」と「真言經衆」であり、先の引用史料とあ

わせると、「一切経転読衆」こと「惣経衆」が一番一九人の五番制、「真言経衆」は五人の輪番制がとられていたと判明する。経蔵からの出納が「毎月个六度」なのは、「惣経衆」の五度に加え「真言経衆」が月に一度出納するためであろうか。

春日社における一切経の転読は、白河院の発願によつて越前国河口庄を料所として康和二年（一一〇〇）に開始されたことが知られているが、ここで注目したいのは、転読の場が春日社の「御廊」だった点である。春日社中門の両脇につながる東西の御廊は「経所」「長講之御廊」「吉田之御廊」「一切経御廊」などの別称があり、一切経の転読は経蔵で行われたわけではなかった。

なお春日社周辺には春日社経蔵以外にも複数の一切経が存在したようである。文永三年（一二六六）一月「尊信置文案」⁽⁴⁾によれば、興福寺法乗院・大乘院・菩提山にそれぞれ一切経があり、春日社の一切経は「白河院一切経」として区別されていた。このうち法乗院が所蔵した「唐本一切経」⁽⁵⁾は、「大慈三昧院御房、元亨四年四月十四日仰云、此御経、当御代西大寺慈道上人被申請間、被安置額安寺云々」⁽⁶⁾とあるように、元亨四年（一二三四）、大乘院門跡・慈信が西大寺長老・慈道信空の求めに応じて額安寺に安置させている。同時に大乘院の一切経も「大慈三昧院御房、元亨四年卯月十四日仰云、此一切経、依無転読、申歎間、我御代被預置大安寺云々」⁽⁷⁾とあり、大乘院に安置されていても転読されることなく死蔵されていた一切経が大安寺に預け置かれた。額安寺・大安寺はいずれも西大寺流真言律宗の影響下にあったとみられ、この動きは鎌倉中期以降の律宗寺院で一切経転読行事が恒例化されていく状況を示す事例として注目される⁽⁸⁾。

春日社では毎日の一切経転読に加え、「臨時一切経」と記録される臨時の一切経転読会があった。『大乘院寺社雑事記』長祿三年（一四五九）九月一七日条に「臨時一切経於社頭八講屋始行、七今日、今日結願之、一切経衆百口毎日参勤云々」とあり、九月一日から七日間、八講屋（現在の直会殿）において行われた。

一切経衆百口は「一切経転読経衆九十五人」に「真言経衆五人」を加えた百名をさすと考えられる。⁽⁴⁶⁾また「春日臨時一切経ハ五千卷ヲ七個日ニ令転読之、百口別ニ初三个日ハ口別六卷宛、中一日ハ口別十二卷、下三个日ハ六卷宛ニ支配之、廻請ハ惣蔵司名字ニテ相催之、廻請ハ惣蔵司代沙汰也」⁽⁴⁷⁾とありさらに「臨時一切経在之、自今日七個日於八講屋行之、天下泰平・河口庄無為之祈祷也、近來如此修之、廻請五通（番之分）、惣蔵司成之、蔵司代ニ申付之云々、寺家御承仕代官相触之、中間法師也、仏供・灯明納所下行、一通廻請ニ経衆ハ不載之、必々参勤故也、御経口別毎日六卷、中間日ハ十二卷、五千卷分也」といった記載から法会の内実が窺える。「自来十一日恒例臨時一切経七個日云々、廻請惣蔵司役也」⁽⁴⁸⁾のように「臨時一切経」が行なわれる頻度は高く、毎年恒例にはなっていないものの行われる場合は九月一日から一七日にかけて実施されている。

以上のような一切経の利用場面のほか、一切経を用いた法会としては、一切経を奉納・収蔵する際に催された「一切経供養」や、延久元年（一〇六九）藤原頼通が宇治平等院で創始した平等院一切経会を典型とする「一切経会」が検討対象として挙げられる。いずれの行事も京都の有力寺社で行われた法会が地方有力寺社や諸国一宮などに伝播していった。とりわけ、一切経会は摂関家が氏族繁栄を願い、その権勢を誇示するがごとく盛大な法会であったが、⁽⁵⁰⁾その営為は院・女院といった公家の有力者へ、また鎌倉幕府や有力御家人さらには室町期においても足利義持が北野社輪蔵における一切経会を創設するなど、法会の継承関係が続いていく。この一切経会については別稿にて整理し検討したい。

本節の結論としては、書写・校合・転読、といった一切経の利用場面において、《経蔵》は必ずしもその

場を提供していない、という点が指摘できる。今回検討できなかった一切経会にあっても、例えば平等院一切経会では、経蔵の外側に設置されている舞台や左右の楽屋、棧敷御所といった施設が法会の主な場となっている。

それでは《経蔵》の諸類型は、収蔵方法の単なるバリエーションなのであろうか。寺社の伽藍の中での《経蔵》の役割を総体的に捉えることで、この疑問に迫ってみたい。

三 《経蔵》の機能

これまで《経蔵》の類型化を試み、その利用場面を史料で確認する過程で、《経蔵》の基本機能である〈収蔵する〉という機能に加え、例えば宝蔵やその系譜に連なるであろう経楼には〈秘匿する〉といった機能が見受けられた。つまり、天下の宝物を蒐集して経蔵（宝蔵）に収め、藤氏長者あるいは院のみがその重宝を閲覧することで権威が醸成されたのであり、経蔵（宝蔵）には、権力を形成し維持する装置としての機能が期待されたわけである。

では、《経蔵》の機能として、他にどのような要素が挙げられるだろうか。①経楼、②書架式経蔵、③輪蔵、④宝蔵、といった《経蔵》の諸類型が相互にどのように差別化され、どのように機能していたか、といった視点が有効であろうと思われる。

その前提として、《経蔵》が併存する点に言及しておきたい。というのも、経蔵に関する概説に、《経蔵》を単線的に捉えている、あるいはそのような誤解を招くという問題点がみられるためである。《経蔵》は一寺社に一棟しかなかったわけではない。例えば鎌倉期の東福寺については、先に引用した建長二年（一二五

○ 一 一月日「九条道家惣処分状」⁽³²⁾が伽藍の全体像を示す。

二階楼門一字〈五間、有妻廂〉奉安置一丈六尺多聞・持国像各一軀、

二階鐘楼・経蔵并東西廊各五箇間、楼門并廊上層、奉安置一尺六寸积迦像千軀、西鐘楼鐘一口、

(中略)

経蔵一字〈三間四面、瓦葺〉、

唐本一切経二部〈一部五千卷、一部七千卷〉家秘書可納当寺者、可安此経蔵、

(中略)

宝蔵二字〈各三間二面、瓦葺〉、

一字 密宗章疏并宝物等、

一字 顕宗章疏并俗書等、

他寺社の書架式経蔵に一切経と併せて納められるような章疏・宝物類が、ここでは宝蔵に安置される。「家秘書」を宝蔵でなく経蔵に安置するよう提言したのは、宝蔵に対して経蔵をより上位のものと位置づけたためであろうか。次に、泉涌寺の場合、これまたすでに引用した承久二年(一二三〇)二月一〇日「泉涌寺殿堂房寮色目」⁽³³⁾に、

一 三門閣

右、三門者、一寺之枢要、諸人之信入、表三解脱門之証入、顕二金剛神之衛護也、今門閣上擬懸大鐘、

即是者略別立鐘樓之意也、

(中略)

一 法輪寶藏

右、輪藏者、安置唐本一切經於八角輪層之中、若有人一轉此藏、則擬轉讀一切經一藏也、(以下略)

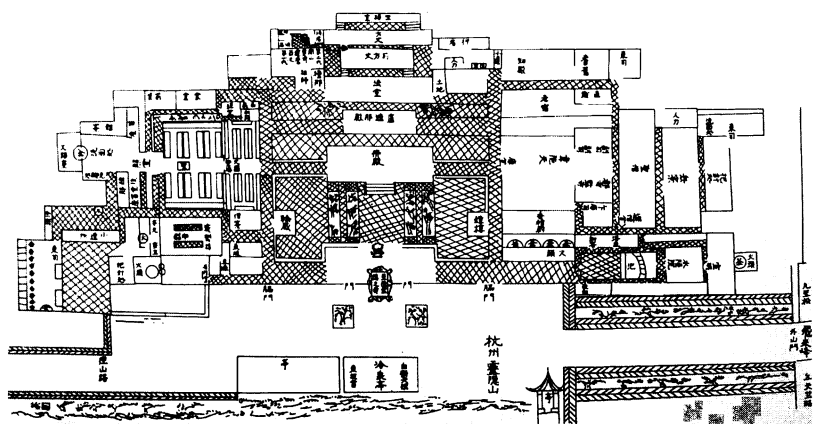
(中略)

一 教藏

右、教藏者、安置大宋傳來律宗台教等之教乘、永備學道之龜鑑、為令法久住広答四恩也、

とあり、一切經は輪藏に、律宗・天台等の章疏は「教藏」に安置することを示している。

《經藏》の併存状況の例として、中国宋代の五山寺院である靈隱寺・天童寺の伽藍配置が参考になる。【図6・7】は東福寺所藏「大宋諸山図」をトレースしたもので、靈隱寺伽藍には「輪藏」「經堂」が、天童寺伽藍には「輪藏」「經藏」「看經堂」が、それぞれみえる。中国における寺院伽藍の歴史的展開については改めて検討を要するが、靈隱寺では鐘樓と相對する位置に輪藏がある点が、また兩寺院において經藏(堂)と輪藏が併存する点が



【図6】靈隱寺伽藍図 東福寺所藏「大宋諸山図」(関口欣也【五山と禪院】より転載。)

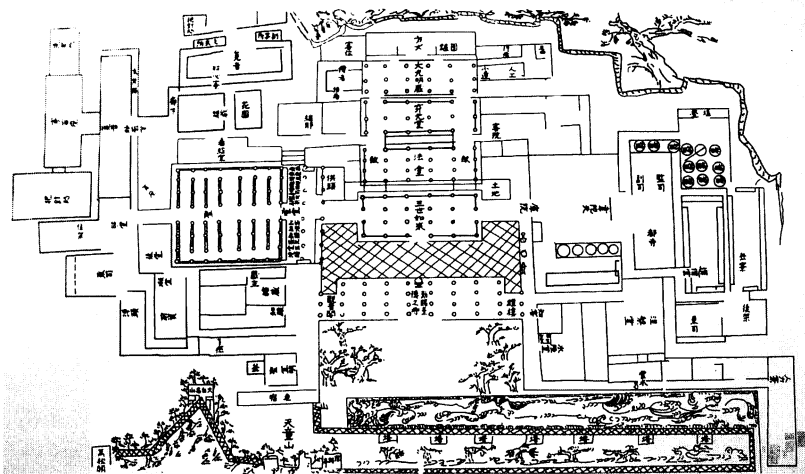
注目される。経蔵と輪蔵の併存は両者の間で機能に差異があることを示すとみてよからう。天童寺の「経蔵」には「看経堂」が隣接するが、閲覧し修学の対象となつた蔵書が「経蔵」に収蔵された經典類だつたと思われる。

中国・宋代における輪蔵の大幅な増設の背景を検討した金井徳幸氏は、当該期の輪蔵がもはや書架として利用される方向性を失い、装飾された輪蔵建築やその回転を救いや畏怖の対象とする俗信仰が広まっていた点を指摘された。

日本においても同様な流れが想定できるだろうか。例えば、相国寺には文安四年（一四四六）の時点で輪蔵の存在がみえるが、その三年前にあたる段階で次のような記録が残る。『建内記』嘉吉三年（一四四三）六月二三日条に、

廿三日、丁未、天晴、御八講第四日、公卿五人云々、相国寺被転一切経、是又今度御作善随一云々、女中為御結縁渡御也、常時制女房入寺、今日為結縁貴賤群衆云々、

とある。「作善」は、造仏・堂塔の建立・写経・仏事供養など、仏縁を結ぶための善事をいうが、ここでは一連の「御作



【図7】 天童寺配置図 東福寺所蔵「大宋諸山図」（関口欣也『五山と禅院』より転載。）

善」のうち「転一切経」に関する記事となる。ときに室町將軍義勝は六月二四日の前將軍義教三回忌にあわせて、その命日（三回忌式日）を結願日とする法華八講を等持寺にて営んでいた。二三日はその第四日にあたる。であれば「御作善」は義教三回忌を中心とした一連の追善仏事をさす語であろう。「転一切経」すなわち一切経転読法会⁵⁷にあたって普段であれば入寺が規制された女房衆の入寺が認められ、さらに「貴賤」が群集したとする。相国寺でも明徳三年（一二九二）の落慶供養の際には「路頭云縦云横、棧敷在左右、都鄙群集而如堵、綺羅充滿而成市⁵⁸」のごとき賑わいをみせたが、ここで注目すべきことは、「貴賤」の「結縁」に一切経が介在している、という点である。

すでに第一節で引用した『大乘院寺社雜事記』寛正三年（一四六二）一〇月二七日条には「一切経御経藏開之拝見、（中略）予小衣上下、為結縁令見之」とあり、大乘院門跡・尋尊が初めて経藏を披見した際もそれが「結縁」のためとしていた。春日社の経藏はその管理人である惣藏司が立ち合わないと開扉できない経藏であり、「結縁」を結ぶことのできるのは極めて限定的な立場にある人物であったといえよう。

一方、相国寺の経藏は輪藏であった。すでに鎌倉期に「若有人一転此藏、則擬転読一切経一藏也⁵⁹」と紹介され日本に齎された輪藏は、一切経との結縁を結ばんと願う人々にその機会を文字通り門戸開放する機能を有したのではなからうか。

岐阜・安国寺経藏内部には多数の落書きが残っている。大半は近世以降の参詣者による落書きである。今後の調査が必要とされるが、中には戦国期の落書きも散見され、例えば輪藏側面に「あふしう大崎のうち、わきやふの、まいやよさえもん、天正十六年八月十日同行六人□□□□」といった墨書がみられる。こうした参詣者の遺した痕跡は、まさに「結縁」を願った人々の営為を物語るものと考えられよう。

おわりに

冒頭で引用した謡曲「輪藏」にも「末世の衆生済度のために、輪藏に納め結縁の、手に触れ縁をむすはせん」という一節があった。本来の〈収蔵庫〉という機能に加え、重宝を〈秘匿する〉という機能を果たしていた経蔵が、輪藏という形態の普及によって〈結縁する〉という機能を、より多くの人々に享受することができるようになったのである。

本稿は非常に雑駁な議論に終始してしまった。事例の呈示も網羅的でないため説得力に欠けるのは否めない。第一節で示した《経蔵》の類型、①経楼・②書架式経蔵・③輪藏・④宝蔵、については、それらの時系列的な変遷をさらに整理する必要がある。また、一切経の利用実態についても、これまた多義語である《一切経会》について更なる検討が必要であろう。鉄眼版の開版という大きな画期を迎えたのちの《経蔵》および一切経の展開をも見据えた上で、上記の課題には改めて取り組んでいきたい。さしあたり本稿は、今後とも《経蔵》研究を続けていく一つの出发点となればよいと考えている。寺院史・建築史・東アジア海域史……と参照すべき先行研究は広く深いが、さまざまな視点から追究しうる《経蔵》はその交錯点としての可能性を大いに秘めていると信じてやまない。

註

(1) 親世清孝校『親世流謠本』(二八八〇)

(2) 禅宗寺院における規矩・行事・堂舎機構・器物などに関する事典。無著道忠著。寛保元年(一七四二)成立。なお現在、

村田無道校『禅林象器箋』(貝葉書院、一九〇九)は、国会図書館「近代デジタルライブラリー」にて刊本画像が閲覧可能。

(3) 『新日本古典文学大系』四一に所収。

(4) 経蔵の概説としては、大蔵会編『大蔵経——成立と変遷——』

〔百華苑、一九六四〕や『国史大辞典』（吉川弘文館）の項目「経蔵」（福山敏男氏執筆）などがある。なお、輪蔵については野崎準氏による一連の研究レポートや、現存する輪蔵の一覧を附した阿住義彦編『自在院史料集 第三集 自在院一切経堂・輪蔵保存工事報告書 附 全国の輪蔵』（二〇〇七）がある。

(5) 一般に一切経と大蔵経は同義語として扱われるが、厳密には両者は区別される必要がある。つまり、中国では「大蔵経」が呼称とともにその内容を固定化させていった経緯があり、漢訳された仏典のうち王室の欽定によって入蔵された一定の經典群を「大蔵経」と呼ぶためである。一方の「一切経」という呼称は、唐代にかけて仏典蒐集と目録編纂がすすめられ大蔵経の構成が定着していく過程で王朝や地域の違いによって併存した呼び名である。

史料上の表記をみると、日本では唐代まで用いられた「一切経」という呼称が末代まで用いられていく。（現代の局面的な現象としては、中国史や対外関係史・東アジア海域史の研究者が術語として「大蔵経」を使用する一方で、日本史の研究者が「一切経」を用いるという偏差も生じている。）

日本で（例外もあるが）宋元代に輸入された版本大蔵経を「唐本（宋本）一切経」と呼ぶ背景には、日本独自に展開した一切経の歴史が関係すると思われ、この点を視野に入れた研究も進展している（上川通夫『日本中世仏教史料論』吉川

弘文館、二〇〇七）。

また、本稿は考察の対象を江戸期以降には敷衍させていない。日本における一切経をとりまく環境は、鉄眼版など国内での版本成立が大きな画期となったことは衆目の一致するところであろう。もちろん経蔵・輪蔵についても近世以降に地域的・階層的に広がりを見せるが、中世以前と近世以降を巨視的にとらえた考察は今後の課題として後考を期したい。

(6) 一切経の利用実態に即した研究は、早くは森克己氏の研究にその視点がみられる（森克己『宋版一切経輸入に対する社会的考察』『新編森克己著作集 四 増補日宋文化交流の諸問題』勉誠出版、二〇一一、初出は一九三六年）。最近では、貝英幸『室町期における地域権力と大蔵経』（佛敎大学総合研究所紀要別冊『一切経の歴史的研究』二〇〇四）、須田牧子『大蔵経輸入とその影響』『中世日朝関係と大内氏』（東京大学出版会、二〇一一、初出は二〇〇七年、初出タイトルは『中世後期における大内氏の大蔵経輸入』、大塚紀弘『宋版一切経の輸入と受容』（鎌倉遺文研究）二五、二〇一〇）、橋本雄『大蔵経の値段——室町時代の輸入大蔵経を中心に——』（『北大史学』五〇、二〇一一）などの研究に一切経の利用実態を明らかにしようという視点がみられる。ただし、貝英幸氏の論考は、大内氏が一切経を政治外交上の道具として『利用』した事例を紹介するものであって、必ずしも一切経の日常利用を考察対象としたものではない。

(7) 上島享『日本中世社会の形成と王権』（名古屋大学出版会、

- (11) 護国寺版「諸寺縁起集」所収。
- (12) なお、唐招提寺に校倉造の経蔵が現存するが、本来的に經典を納める収蔵庫であつたかどうかは検討の余地がある。奈良市教育委員会『唐招提寺宝蔵及び経蔵修理工事報告書』(一九六二) 参照。
- (13) 『続群書類従』二七下・釈家部に所収。
- (14) 「九条道家惣処分状」九条家文書、『鎌倉遺文』七二五〇号。
- (15) 『東福寺誌』所収。
- (16) 太田博太郎『日本建築史論集3 社寺建築の研究』(岩波書店、一九八三)。また川上貢氏は、東福寺所蔵「三聖寺古図」の解説で図中の経蔵が二階建であることを示している
- (17) 川上貢「三聖寺伽藍古図について」(『建築指図を読む』中央公論美術出版、一九八八)。
- (18) 本史料の校訂にあたっては、須田牧子氏より御助言を得た。
- (19) 京都府教育委員会『重要文化財妙心寺法堂・経蔵修理工事報告書』(一九七六)。
- (20) 梅澤亜希子「室町時代の北野寛蔵坊——勧進と造営——」(『仏教芸術』一九四、二〇〇七)。
- (21) 『大乘院寺社雜事記』文正元年(一四六六)二月四日条。この日、尋尊は「一切経御経蔵」を開き「御経共」の校合を行うとともに、先に持ち出していた「震筆論等」を返納している。この校合・出納には衣を着用した惣蔵司代と承仕代が随行し立ち合っている。
- (22) 年月日未詳「東寺新造仏具等注進状」(『教王護国寺文書』三〇号、『平安遺文』四九六三三)。
- (23) 佐藤英哲「初期叡山の経蔵について——新出の『御経蔵目錄』『御経蔵櫃目錄』を中心として——」(『日本名僧論集二最澄』吉川弘文館、一九八二、初出は一九五三年)。
- (24) 『藤涼軒日録』長享二年(一四八八)五月一三日条。
- (25) 「泉涌寺殿堂房寮色目」『鎌倉遺文』二五七五号。
- (26) 太田博太郎前掲注(16)。
- (27) 『鎌倉国宝館図録 第一五集 鎌倉の古絵図Ⅰ』(一九六八)、神奈川県教育委員会『神奈川県文化財図鑑 建造物篇』(一九
- (11) 護国寺版「諸寺縁起集」所収。
- (12) なお、唐招提寺に校倉造の経蔵が現存するが、本来的に經典を納める収蔵庫であつたかどうかは検討の余地がある。奈良市教育委員会『唐招提寺宝蔵及び経蔵修理工事報告書』(一九六二) 参照。
- (13) 『続群書類従』二七下・釈家部に所収。
- (14) 「九条道家惣処分状」九条家文書、『鎌倉遺文』七二五〇号。
- (15) 『東福寺誌』所収。
- (16) 太田博太郎『日本建築史論集3 社寺建築の研究』(岩波書店、一九八三)。また川上貢氏は、東福寺所蔵「三聖寺古図」の解説で図中の経蔵が二階建であることを示している
- (17) 川上貢「三聖寺伽藍古図について」(『建築指図を読む』中央公論美術出版、一九八八)。
- (18) 本史料の校訂にあたっては、須田牧子氏より御助言を得た。
- (19) 京都府教育委員会『重要文化財妙心寺法堂・経蔵修理工事報告書』(一九七六)。
- (20) 梅澤亜希子「室町時代の北野寛蔵坊——勧進と造営——」(『仏教芸術』一九四、二〇〇七)。
- (21) 『大乘院寺社雜事記』文正元年(一四六六)二月四日条。この日、尋尊は「一切経御経蔵」を開き「御経共」の校合を行うとともに、先に持ち出していた「震筆論等」を返納している。この校合・出納には衣を着用した惣蔵司代と承仕代が随行し立ち合っている。
- (22) 年月日未詳「東寺新造仏具等注進状」(『教王護国寺文書』三〇号、『平安遺文』四九六三三)。
- (23) 佐藤英哲「初期叡山の経蔵について——新出の『御経蔵目錄』『御経蔵櫃目錄』を中心として——」(『日本名僧論集二最澄』吉川弘文館、一九八二、初出は一九五三年)。
- (24) 『藤涼軒日録』長享二年(一四八八)五月一三日条。
- (25) 「泉涌寺殿堂房寮色目」『鎌倉遺文』二五七五号。
- (26) 太田博太郎前掲注(16)。
- (27) 『鎌倉国宝館図録 第一五集 鎌倉の古絵図Ⅰ』(一九六八)、神奈川県教育委員会『神奈川県文化財図鑑 建造物篇』(一九

七一、松尾剛次「中世都市鎌倉を歩く」(中央公論社、一九九七)ほか。

(28) 重源が建久六年(一一九五)に寄進した宋版一切経を収蔵するために新築された経蔵は類例の少ない大仏様の経蔵であったが、昭和一四年焼失し現存しない。

(29) 『群書類従』二四・釈家部に所収。

(30) 田中貴子「宇治の宝蔵——中世における宝蔵の意味」(『外法と愛法の中世』砂小屋書房、一九九三、初出は一九八九年)、上島亨前掲書第一部第二章「藤原道長と院政」(初出は二〇〇一年)、横内裕人「宇治と王権——『憂し宇治』の実像」(院政期文化研究会編『院政期文化論集 三 時間と空間』森話社、二〇〇三)、同「中世前期の寺社巡礼と宝蔵——寺社重宝を介した縁の形成——」(中野玄三・加須屋誠・上川通夫編『方法としての仏教文化史——ヒト・モノ・イメージの歴史学』勉誠出版、二〇一〇)。

(31) 清水弘「平安時代仏教建築史の研究——浄土教建築を中心に——」(中央公論美術出版、一九九二)。

(32) 『平泉町史 資料編一』一一号、『平安遺文』二〇五九号。

(33) ここではさしあたり、最近の研究動向を整理した上で解釈を施した丸山仁氏と入間田宣夫氏の論考に依拠する。(丸山仁「院政期の王権と御願寺——造営事業と社会変動——」(高志書院、二〇〇六)、入間田宣夫「都市平泉研究の問題点」『学習院史学』四八、二〇一〇)。

(34) 深沢徹「羅城門の鬼、朱雀門の鬼——『江談抄』における、

権力産出装置としての楼上空間——」(『ブール学院短期大学紀要』二三、一九八四)。

(35) 須田氏・大塚氏前掲注(6) 論文。

(36) 『岐阜県史 史料編 古代中世二』および『岐阜県史 通史編 中世』七〇八頁。

(37) 中尾堯「平安写経の世界——妙蓮寺蔵『松尾社一切経』をめぐる——」(『仏教史学研究』四〇(二)、一九九七)、同編「京都妙蓮寺蔵松尾社一切経調査報告書」(大塚工藝社、一九九七)、同「院政期の松尾社における一切経供養をめぐる」(伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館、二〇〇二)。

(38) 嵯峨井建「鴨社の神仏習合」(財団法人礼の森顕彰会事務局編『鴨社叢書 第一巻 鴨社の絵図』一九八九)、同「中世上賀茂神社の神仏習合」(岡田精司編『祭祀と国家の歴史学』塙書房、二〇〇一)、上島亨前掲書第一部第三章「中世宗教支配秩序の形成」(初出は二〇〇一年)。

(39) 外観上類似したものとして称名寺経蔵がある。鎌倉末期作成の「称名寺絵図並結界図」にみえる「経蔵」には本体脇に付属する施設がみられ、その用途は史料での裏付けがなお必要だが、経所である可能性がある。なお図5は、難波田徹編『日本の美術 七二 古絵図』(至文堂、一九七二)より転載した。

(40) 『岐阜県史 史料編 古代中世二』、『国府町史 史料編一』二七号。

(41) 国立公文書館所蔵『三箇御願料所等指事』（大乘院文書）、
『鎌倉遺文』九六〇〇号。

(42) 承久二年八月一六日「雅縁讓状」（『福智院家文書』五〇
号）。

(43) 前掲注（41）史料の追記部分。

(44) 同右史料。

(45) 大塚紀弘前掲注（6）論文。

(46) 『大乘院寺社雜事記』寛正四年（一四六三）二月一日条に
所載の「当門跡方諸御願等供衆令自専条々」。

(47) 『大乘院寺社雜事記』文正元年（一四六六）一〇月一日
条。

(48) 『大乘院寺社雜事記』明応二年（一四九三）九月一日条。

(49) 『大乘院寺社雜事記』延徳元年（一四八九）九月九日条。

(50) 福山敏男「宇治平等院の経蔵と納和歌集記」（『日本建築史
研究 続編』墨水書房、一九七二、初出は一九五一年）、斎藤
利彦「平等院「一切経」と舞楽」（『仏教史学研究』四五（二）
二〇〇二）、同「一切経と芸能——平等院一切経会と舞楽を
中心に——」（『佛教大学総合研究所紀要別冊「一切経の歴史
的研究」二〇〇四）。

(51) 永村眞「鎌倉時代の饒阿寺経営——郷々寺役記を通して
——」（『栃木県史研究』二四、一九八三）、高橋慎一朗前掲

注7著書、田中奈保「鎌倉期足利氏の経済事情」（『早稲田大
学大学院文学研究科紀要 第四分冊』五一、二〇〇六）。

(52) 前掲注（14）史料。

(53) 前掲注（25）史料。

(54) 宋代禅宗寺院の機構については伽藍図のほか『禅苑清規』
『叢林校定清規』『禅林備用清規』といった清規の分析も有
用である。横山英哉「宋朝禅林の伽藍構成について」（『禅研
究所紀要』六・七、一九七六）や訳注本の解説が参考となろ
うが、今後の課題としたい。また、山西省・大同の華嚴寺の
壁蔵や、明代以降にみられる蔵経楼など、中国寺院における
《経蔵》の類型とその展開についても今後の検討課題とした
い。

(55) 金井徳幸「宋代転輪蔵とその信仰」（『立正史学』一〇四、
二〇〇八）。

(56) 『建内記』文安四年七月一四・一九日条。

(57) さらに踏み込んで解釈すれば、「被転」を「施入」と捉え、
一切経を収蔵する輪蔵の落成も含めた一切経供養会であった
可能性も考えられるが、なお検討を必要とする。

(58) 『相国寺供養記』（『群書類従 二四 釈家部』所収）

(59) 前掲注（25）史料。